

Campus Today



第18回 日本総合歯科学会総会・学術大会を開催

全国から総合歯科医療に携わる研究者や臨床医が集結
 高度で包括的な診療の未来像を共有

「総合歯科の未来展望―アドバンスな総合診療を目指して―」をテーマとした第18回日本総合歯科学会総会・学術大会が、11月23日(日)と24日(月)振替休日)の2日間にわたり、松本市の中央公民館(Mウイング)にて開催された。本学病院初診室(総合診断科・総合診療科教授)の音琴淳一大会長のもと、全国から総合歯科医療に携わる研究者や臨床医が集結し、現代の複雑な歯科医療ニーズに対応するための、「総合診療」のあり方について、活発な議論が交わされた。

本学会プログラムでは、まず(一社)日本歯科専門医機構の今井 裕理事長による特別講演「歯科専門医制度と総合歯科の役割」が行われた。今井理事長のご講演は、わが国における歯科専門医制度の確立と将来の展望について、極めて示唆に富む内容であり、参加者一同、大変感銘を受けた。続いて、植田耕一郎先生(医療法人社団光生会 陵南診療所 摂食リハビリテーション課 下部長)が「理念に基づく21世紀歯科医療の展開」と題して、講演された。

また、教育講演では、木尾哲朗先生(九州歯科大学 特任教授・名誉教授)が「総合歯科医が知っておきたい医療のコミュニケーション」をテーマに、興味深い内容の講演を行った。

シンポジウムでは、野田 守先生(若手医科大学 歯学部 歯科保存学講座)が



講演された日本歯科専門医機構の今井理事長(左)と音琴大会長



講演する今井教授

治療学分野教授)と本学の今井美恵教授(地域連携歯科学講座)がシンポジウムとして登壇し、活発な質疑応答が交わされた。本学からも多数の演題発表があり、特に若手優秀ポスター発表では、保存科の杉野凜太郎診療助手の演題「視覚障害を有する研修医の治療

経験」が注目を集めていた。音琴大会長は大会のテーマ通り、総合歯科が目指すべき高度で包括的な診療の未来像を共有でき、地域の歯科医療の質向上に貢献する実りある2日間だったと総括した。大会準備委員長を務めた病院初診室の大木絵美講師の尽力にあらためて感謝したい。

参加者は、信州の豊かな自然と歴史的な街並みを持つ松本での交流を深めつつ、知識と技術の研鑽に励んだ。

（松本歯科大学 学術大会委員長 内啓二）

「いい歯の日」 子供記者が本学病院を取材 ～いい歯を支える仕事に迫ろう～

「いい歯の日」の11月8日(土)、本学を会場に、子供向けの取材教室「いい歯」を支える仕事に迫ろう」が開かれた。

歯科医療職や歯科医療の現場に関心のある子供記者たちが訪れ、歯科医師、歯科衛生士、歯科技工士の三つの歯科医療職に質問したり、病院で行われている最新の治療やケアを見学したり、大学全体で取り組む健康啓発活動の一端を体感したりしながら熱心に取材していた。

取材教室は、本学が信濃毎日新聞株式会社との要請で企画し、大学病院などの全面協力により実施した。

子供記者たちは創立30年記念棟に集まり、まずは3種の歯科医療職と対面。それぞれの仕事

創業者・矢ヶ崎 康先生の思いを受け継ぎ

学会のさらなる発展をめざす 第100回松本歯科大学学会

松本歯科大学学会(例会)が11月27日(木)に行われた。今回で第100回の開催となった本学会は、本館1階の学生ラウンジに学術発表のポスター21題が展示発表された。

基礎・臨床研究から症例報告、そして、本学の教育に関する内容まで幅広い課題が展示された。18時からは発表者を囲んだ討論が各ポスター前で行われ、学内学会ならではの具体的なかつ深い議論が随所で見られた。その後、投票により特別賞、優秀発表賞が選定され、大学院歯学独立研究科の平岡行博研究科長から表彰された。

第1回の本学会設立大会で発表し、今回の第100回大会でも2



右から優秀発表賞の岩本さん、鷹股特任教授、特別賞の高橋さん

の内容について聞いたあと、日ごろから疑問に思っていることを次々と質問、回答を熱心にメモしていた。病院も見学し、保存科で山本昭夫特任教授からマイクロスコープを使った治療の説明を聞いたり、小児歯科で正村正仁准教授から子供たちがより安心して安全に治療を受けられる工夫について聞いたりした。

また、北棟1階ラウンジで開催中だった、本学が普及推進を図るカムカム(噛む噛む)メニューの関連事業の一つ「カムカムメニュー写真コンテスト」の表彰式も見学。応募作品などから作った「カムカムプレート」を試食しながらメニューの普及を図る増田裕次特任教授から、意識的によく噛んで食べることを話していた。

当日の取材教室の様子は、11月23日(日)付の信濃毎日新聞企画特集ページ「ユーステラス」で大きく紹介され、子供記者たちが率直な視点でまとめた取材記事もその中で掲載された。



病院保存科で診療のデモを取材する子供たち

あり、当時の教職員熱意を強く感じるところである。同年12月には学会の機関誌として『松本歯学』が刊行された。学会設立および機関誌創刊にあたり、創業者・矢ヶ崎 康先生は、教育のための研究への熱意と勇気、また、教育の基礎となる研究の重要性を説き、本学会の重要な存在意義となっている。

これまでに2回(総会・例会)、延べ100回におよぶ本学会の発表内容には、継続的に教育に関する研究がみられ、学会設立当時の方向性が堅持されてきた。矢ヶ崎 康先生や教職員の当時の熱い思いを受け継ぎ、次の50年に向けて、松本歯科大学学会は本学の教育研究の拠り所として発展していくと確信できる第100回学会であった。

受賞者は以下の通り。敬称略
 ▽優秀発表賞Ⅱ 岩本莉奈「血管内皮細胞 RANKLシグナルはIL-1βを介して骨の老化を加速させる」
 ▽特別賞Ⅱ 高橋拓実「PTHによる骨形成作用における骨髄間質細胞由来 Wntの役割」

(松本歯科大学学会会報、川原一郎 大学院院院員 歯学部 教授)

予想もしなかった参与と就任要請

内閣官房参与
松本歯科大学理事(特命)
特命教授
飯島 勲

今月号では「プレジデント」12月5日号「リーダーの掟 飯島勲」より、「トランプ大統領の『楽しくないこと』は最大級の賛辞だ」の記事を要約して紹介します。

いま、私は韓国にいる。高市 早苗首相に同行してアジア太平洋経済協力会議(APEC)へ向かうためだ。

以前の連載で、私は「新内閣が発足したら、今度こそ内閣官房参与の仕事を離れ、個人・飯島勲として新しい評論活動を始めた」と考えている」と書いた。

私はこれまで高市首相と接点がほとんどなかったため、ふたたび参与に任命されることは100%ないと思っていたからだ。

しかし10月21日、高市首相から私のもとに「内閣官房参与(特命担当)」を引き受けてほしい」と

離れのまま、それだけの時間を過ごしている家族の方々の気持ちには察するに余りある。私個人としては、拉致被害者の家族の方々には複雑な思いがないとはいわれないが、できる限りのことをしたいと思っている。

高市政権で私が驚いたのは支持率の高さだ。首相に選出された10月21日から28日まで、新聞各社が支持率を公表しているが、最も高いのは産経新聞の75.4%で、最も低いのは共同通信の64.4%という結果となった。不支持率は各社20%前後となっており、9月に集計された石破政権の不支持率よりも大幅に改善している。

これを単なる「祝儀相場」と見ることもできるだろうが、逆風が吹いていた岸田政権、石破政権ではその祝儀相場すらなかったのだから、それだけ高市首相に期待がかけられているということだと思える。

さらに注目すべき点が二つある。一つは、若年層から支持が集まっている点だ。毎日新聞は「比較的若い世代から支持されている」、日経新聞は「自民党の弱点とされた現役世代からも支持を得ている」と報道しているほか、産経新聞とFNNが実施した合同世論調査では、60代以下の支持が比較的低いという結果が出ており、これまでとは違う風向きを感じている。

これを機に若者が政治に関心をもち、どんどん政治に口出しをしてくれるようになってほしいと思う。政治家は決して遠い存在ではない。彼らの政治生命

を握っているのは投票権を持つ自分たちなのだ。自分たちが良いと思った政治家に票を入れることで、選ばれなかった政治家は職を失うことになる。そうした自分たちが暮らしやすい日本をつくらなければならない。

そしてもう一つは、高市首相の身辺についてである。ふつう新総理が誕生すれば、新聞がネタにするようなネガティブな報道が出てくるものだが、高市首相にはそれがまったくなかった。そうした報道があると、事実かどうかにかかわらず対応しなければならぬし、それを後追いでする報道も出るから、政策そのものに注目してもらおう機会が減ってしまう。

10月28日に行われた日米首脳会談も素晴らしかった。「日米同盟の新たな黄金時代に向けて」という、日米関係を強化する文書と、レアアースの供給確保に関する文書に対して合意がなされたのは既報の通り

だが、私が注目したのはドナルド・トランプ大統領の演説で「われわれは長く良い関係を築き過程を楽しんで来よう。ただ楽しくないこともある。彼女はやり手だ」という発言があったことだ。わざわざ「楽しくないこともある」というのは不穏な発言に見えるかもしれないが、対等な関係での取引はお互いの落としどころを探すことになるため、100%満足いく結果が出ることはほとんどない。これは国際関係でもビジネスの世界でも同じだ。この「楽しくないこともある」はむしろ、トランプ大統領が高市首相を対等なデイトル(取引)の相手として認めた証ではないかと思っている。

今後、この「リーダーの掟」では少し味付けを変えて、辛口で私なりに思うことを書いていきたいと思っている。世論や一般的な考えとは対立することもあるかもしれないが、ご理解いただければ幸いです。



トランプ大統領と文書を交わす高市首相(右)

医療関係者と介護関係者が連携し口腔機能向上に向けた啓発活動を行う中で、本会のような口腔管理に尽力されている方々を称えることが地域にとって重要な口腔ケアのモチベーション向上に繋がっていくことを期待している。

(地域連携歯科 助教 田村 賢至)

本学共催 しおじり優良口腔ケア表彰式 4人に健全歯特別賞

「しおじり優良口腔ケア表彰式」が10月23日(木)、塩尻市保健福祉センターで行われた。塩尻市歯科医師会、塩尻市の口腔摂食嚥下関係委員会が主催し、本学が共催して4年目となる取り組みで、高齢者、介護者、介護保険事業所の3部門について表彰が行われた。



表彰式に出席された方々

表彰の対象は、市内在住の90歳以上または75歳以上の要支援・要介護認定者のうち、歯を20本以上保持する個人や、要介

護者の口腔ケアに積極的に関与している家族や連携に熱心な施設で、夏までに市内の歯科医師、歯科衛生士によって推薦された後、委員会での選考を経て選出される。今年は高齢者部門で16人、介護者部門で3人、事業所

長野県「子どもの健康週間」において 幼児対象の歯科保健活動を実施

2025年度の長野県における「子どもの健康週間」の取り組みとして10月17日(金)、広丘南保育園(塩尻市)において、本学より派遣された歯科医師と歯科衛生士による、幼児を対象とした齲蝕予防活動(日本小児科学会長野地方会主催、長野県小児保健協会および松本歯科大学共催)が展開された。

この取り組みは、日本小児科学会が毎年10月の約1週間を「子どもの健康週間」と定め、キャンペーン活動を推進する中で行われている。長野県においては毎年継続的に本学の歯科医師と歯科衛生士による出張歯科保健活動が実施されており、継続性のあるアクティブでユニークな取り組みとして、学会内での高

評価を得るに至っている。当日の活動は、年少、年中、年長のクラス別に行われ、まず筆者より、むし歯の成り立ちやブラークの有害性について、園児にも分かる言葉で解説した。その後、本学病院小児歯科所属の笠原由香歯科衛生士と宮尾琴音歯科衛生士が、大きな口の模型や歯ブラシ、バイキン(細菌)のマスコットなどを使って、歯ブラシの持ち方、歯に対する動かし方といった歯磨きにおけるコツを優しい口調で丁寧に説明した。歯ブラシ練習終了後の質疑応答では、「バイキンの顔(形)を覚えてください」といったかわいものから、「虫歯をそのままにしておくと『痛い』なる以外にも困った事が起きませんか?」といった鋭いもので、数多くの質問が寄せられ、歯科医師と歯科衛生士はその回答に

息切れる程の状態となった。たいへん盛り上がった本年度の「子どもの健康週間」における歯科保健活動であるが、一方で本学病院には、今現在もいわゆる「低年齢児多数歯重症齲蝕症」の子どもが多数来院される現状がある。来年度以降も積極的に本活動を継続し、さらに発展させていく事で、このような問題の解決に道筋をつけたいと強く心に誓っている。

古い世代の日本人には、病気を治してもらおうのだから多少の苦痛は我慢すべきだ...といった考え方が残っていました。医療者の側でも、痛い処置や手術に尻込みする患者をしっかりと受け止めることができていました。やはりコミュニケーションの確立と「無痛化」がカギだったのです。それにしても、子どもを相手にする医療者が、子どもたちの恐怖の的となるなんて...ナ



参加者に歯磨き指導する宮尾歯科衛生士

創立者の「視点」



大学誌編集主任
特任教授
笠原 浩

もその典型でした。アングロサクソン流の「子どもは厳しく躾けるべきだ」とする考え方で、「ききわけのない子」は身体抑制による「強制治療」が危険防止のためにも当然だとされていました。

昔の歯科は「最も痛みと関りがある診療科」と言われていたものでした。数十年前の統計で、歯科を受診する患者の8割以上が「痛み」を主訴としていたとありますし、歯科疾患の治療処置の多くがかなりの「痛み」を伴うものだったからでしょう。「歯医者には痛みを我慢できない」という言葉が、歯医者を大嫌いなものも当然だったのです。

この時代の「ムシ歯の洪水」の渦中で、子どもたちの多数歯重症齲蝕を相手に苦闘を続けていた筆者も、精神的にすっかり疲れ果ててしまいました。

そこで大きく方向転換をすることにしました。幼児でも発達レベルが3歳を超えていれば、適切なアプローチでコミュニケーションを確立することが可能です。その上で、「痛い」とは絶対にならない」と約束し、それを厳守して信頼を得ることにしました。

次には、「痛くない歯科治療」の開発に全力を尽くしました。「全身麻酔」「低濃度笑気吸入鎮静法」、無痛の局所麻酔法などを、積極的に応用しました。「母子分離制」は全廃して、診療時にも母親には必ず同席してもらうようにしました。

こうした新しい小児歯科治療は、結果的には大成功を収めることができました。やはりコミュニケーションの確立と「無痛化」がカギだったのです。それにしても、子どもを相手にする医療者が、子どもたちの恐怖の的となるなんて...ナ

痛みと歯科医療②

一九六〇年前後にアメリカから直輸入された当時の小児歯科

日本私立歯科大学協会主催 第16回歯科プレスセミナー 宇田川信之学長がコーディネーターとなりパネルトーク



左からコーディネーターの宇田川学長、パネリストの羽村会長、花形院長、塚崎教授

一般社団法人・日本私立歯科大学協会は10月28日(火)、第16回歯科プレスセミナーを、東京のアルカディア市ヶ谷歯学会館内の特設会場およびオンラインで開催した。全体テーマを「口腔細菌と全身疾患の関わり」とし、同協会専務理事を務める本学の宇田川信之学長がコーディネーターとなり、パネリストたちから率直な発言を引き出し、活発な意見交換を後押しした。

パネルトークは「歯科医師・医療者が語る「口腔から考える全身の健康」」をテーマに掲げ、同協会会長で日本歯科大学生命歯学部部長の羽村章、専任教授と山梨県甲府市の花形歯科医院の花形哲夫院長、昭和医科大学歯学部口腔生化学講座の塚崎雅之教授の3人がパネリストを務めた。それぞれが自己紹介し、専門とする領域から口腔の健康と全身疾患の関連性についての見解を述べ、宇田川学長がさらに3人の見解を引き出しながら進行した。羽村特任教授は、高齢者でも歯が残っていることにより歯周病のリスクが高まり健康を損ねる恐れがあることをまず指摘。花形院長は開業医の立場から地域の歯科診療を充実させるには医療、介護、福祉、行政との連携が重要であるなどとした。塚崎教授は、歯周病とさまざまな病気との関連性について、研究ベースでも新たな仮説が次々と出てくる現状を分かりやすく紹介するなど、宇田川学長がリードしてテーマに迫った。

同協会は、さまざまな人の健康的な生活を考えサポートすることを目指し、歯科医療に関するさまざまなテーマを設定し、定期的にプレスセミナーを開催している。今回のテーマは、これまでのセミナー出席者からの

「工夫を凝らしたオリジナル作品40点が応募」
第12回カムカムメニュー写真コンテスト表彰式

今年度も「第12回カムカムメニュー写真コンテスト」を開催した。よく噛んで食べることは健康に良い影響をもたらすとされており、「カムカムメニュー」とは、食感や噛み応えを工夫し、自然と咀嚼を促す献立を目指す。この「カムカムメニュー」の写真を公募して11月8日(土)、最優秀賞をはじめとする各賞の表彰式を本学で行った。

今年度は40の作品が寄せられ、よく噛むことを促す工夫が凝らされた多彩な作品の中から、最優秀賞には「ごぼうの蒲焼き」(吉田美子さん・松本市)が選ばれた。表彰式に先立ち、筆者が「健康やかな食のために——咀嚼の大切さ」と題して講話を行った。咀嚼が健康維持に重要であることを、参加者の皆さんが深くうなずきながら聞いておられる様子が見えてくることを、大変うれしく感じた。



表彰状と副賞を受けた入賞者

病院だより vol.70

整形外科 (2) 変わりゆく リハビリの常識

近年、リハビリテーションの常識は大きく変わってきています。かつては「正しい姿勢をつくる」「特定の筋肉を鍛える」といった「決まった形」を目指す方法が主流でした。しかし現在では、人の体は一人ひとり違う、同じアプローチがすべての人に合うわけではないという考

え方が広がっています。リハビリの中心は「どれだけ本人の生活にフィットした動きを一緒に見つけられるか」とシフトしているのです。

例えば腰痛では、「背筋を伸ばす姿勢が正しい」と言われた時代もありましたが、今ではどの姿勢が自分にとって楽か、同じ姿勢を続けることが痛みの軽減につながる、といった考えが重視されています。正解は一つではなく、動きの幅を広げ、生活の中で使いやすい身体をつくるのが目的となっています。

また、筋力を鍛えるだけでなく、呼吸や重心移動、体の使い方を含めた総合的に見直す「動きの学習」という視点も重要になってきました。正しい動きを覚えるというより、自分の体に合った

た楽な動き方を学び直す、というイメージに近いかもしれません。こうした変化を支えるために、当科では日々の臨床だけでなく、さまざまな角度から身体を理解する取り組みを進めています。その一つとして、本学の特色を生かし、医科と歯科が協



スタッフは患者さんに最適なリハビリを構築する

力しながら、姿勢や歩行と口の機能の関係について簡単な検討を始めています。詳細はまだこれからですが、異なる専門が交わることで、身体を「全体として捉える視点」が大きく広がる手応えを感じています。

とはいえ、リハビリの主役はあくまで患者さん自身です。どれだけ良い方法があっても、本人が安心して前向きに取り組める環境が欠かせません。そこで今回は、患者さんがリハビリに向き合う際に大切にしたい心構えについてお話ししたいと思います。また、それを支えるために私たちがどのような姿勢で臨んでいるのか、医科歯科連携の取り組みとともに紹介していきます。

敬称略
受賞者と作品名は次の通り。

- ◎最優秀賞
吉田美子 「ごぼうの蒲焼き」
- ◎優秀賞
畑中智恵子 「根菜パン」
- ◎松本歯科大学賞
石原春美 「生薑花生のミニ五平餅」
- 井原栄治 「アサギモチと生薑花生のミニ五平餅」
- 小澤松子 「マヌカハニー、養生のカムカム」
- ◎審査員特別賞A
上條奈緒美 「切干大根とカラフルな養生巻」
- 西牧俊郎 「ちくわの硬野菜と揚げ」
- 貝梅順子 「カリッとベリーのまろおこし」
- 相城悠真 「秋の味覚を味わおう!」

副会長が歯科医師の現状を詳しく解説したり、日本歯科大学生命歯学部の沼田幸博教授の基調講演「口腔細菌と全身疾患の関わりから考える歯科医療の未来」などもあり、参加者が高い関心を寄せていた。

赤十字血液センターの採血活動に協力
26人が400mlの全血を提供

長野県赤十字血液センターの採血活動が11月7日(金)、本学で行われた。職員らが本館1階の学生ラウンジに設けられた受付コーナーに集まり、事前登録や健康チェックを済ませたあと、移動採血バスに移動して献血した。

本学では毎年4月と11月の年2回、同センターの採血活動に協力している。今回は27人が協力を申し出て、採血可能となった26人が400mlの全血献血をした。献血した血液は、輸血

献血に協力する教員

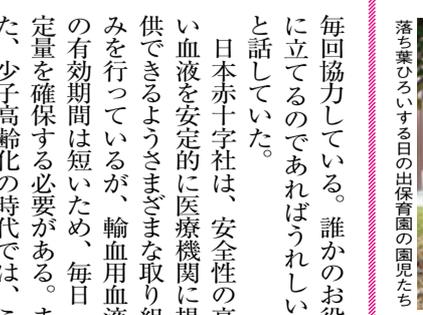
用血液や血液製剤として医療に利用されるという。協力した職員の一は「都合がつく場合は毎回協力している。誰かのお役に立てるのであればうれしい」と話していた。

日本赤十字社は、安全性の高い血液を安定的に医療機関に提供できるようにさまざまな取り組みを行っているが、輸血用血液の有効期間は短いため、毎日一定量を確保する必要がある。また、少子高齢化の時代では、これまで以上に若年層に献血に関心をもってもらったり安定的に献血に協力してもらったりすることが重要になっている。今回、同センターは、学生の協力者に対して、学問の神様で知られる松本市の深志神社の「オリジナル学業お守り」を贈り、協力を呼び掛けている。

園児たち黄葉のキャンパスに遊ぶ

たくさんの木々に囲まれたキャンパスの庭は11月、一年で最も彩り豊かな季節を迎えている。昼と夜の寒暖差が大きくなるにつれて紅葉は輝きを増し、さまざまな木々が植えられている中庭では、学生が昼休みに友人と動画撮影に興じたり、地域の人が散策や落ち葉拾いに訪れたり、この季節ならではのひとときを楽しむ人の姿が見られる。

11月11日(火)には、塩尻市立日の出保育園の1歳児クラスの子供たち23人が訪れ、引率の保育士らとともに中庭で、木の葉や木の実拾いを楽しんでいた。市内広丘にある園から、バギーに乗るなどして30分ほどかけてやってきた



落ち葉をひろる日の出保育園の園児たち

生涯を教育に捧げられた 前学長・名誉教授 川原一祐先生ご逝去



2001.12.10 式に参列した矢野 雅理事長や宇田川信之学長はそれぞれ弔辞をおくり、在りし日の川原先生をしのび永別を惜しんだ。川原先生は、信州大学医学部助教

学事部長や教養部長、学務部長なども歴任された。2002年4月からは名誉教授、特任教授となり、2005年5月からは学校法人松本歯科大学理事、また常務理事として法人業務にも従事され、2006年4月からは学監を務めた。学長就任は2014年7月で、第9代学長を務めていた現理事長の矢野雅先生からバトンを引き継ぎ、今年6月までその重責を担い、本学の発展に力を尽くされた。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

万が一の火災に備え防火の意識高める 大学・病院 防火防災訓練

大学と病院の防火・防災訓練が10月7日(火)、実施された。午前の部では創立30年記念棟北側敷地、主に新規職員向けに消火器取扱説明と粉末消火器を用いて消火する訓練、本館7階ホールではCSK総合防災株式会社担当者のサポートによる屋内1号消火栓の取扱説明と屋上で放水訓練などが行われた。その後本館南棟4階屋上で斜降式救助袋の取扱説明と救助袋を使って地上1階に降りる訓練が行われた。訓練を体験した職員は、「実際にやるのは思ったよりも難しく、災害が起こった際の対策を日常から考えていなければならぬ」と話していた。また、本年度は、震度6弱の



消火器による初期消火訓練を行う職員

地震発生時の出火を想定し、実習館で授業中の歯学部第1学年と講義館で授業中の衛生学院第1学年を対象として安全確保のシエイクアウト訓練と避難誘導訓練を行った。歯学部の訓練を担当した田所治教授は「普段から家族と連絡手段を話し合うのが大切」とし、衛生学院の金銅英二学院長

は「実際に災害が起きた際は暗い中での避難も考えられ、素早くて確かな行動が大切」と述べていた。午後の部では病院内で病院職員が担架やキャリガンなどの避難用具の使用法や避難方法の手順を確認した後、実際に避難器具を使い訓練を行った。次いで病院2階技工室からの出火を想定し、入院患者・外来患者(模擬役)の避難誘導訓練が行われた。今回、学生と病院関係者の避難誘導では自衛消防隊の行動訓練も併せて実施し、各地区隊と本部隊との間で無線機等を使用して通報連絡訓練が行われた。本年度の防火・防災訓練には職員や学生ら約300人の参加があり、常日ごろから一人ひとりが防火の意識をしっかりと持ち、学生生活や業務にあたる必要性をあらためて認識する機会となった。

Alumni News 松本歯科大学校友会

静岡県支部 内田啓一特任教授が特別講演 「歯科エックス線画像から広がる 全身疾患のスクリーニング」



内田特任教授(左)と露木先生

本年度の沼津歯科医師会の通常学会を10月18日(土)、静岡県沼津市歯科医師会館において開催した(オンライン併催)。講師に、松本歯科大学病院初診室総合診療科・総合診療科特任教授であり、同大学歯科ドックの責任者を務められる内田啓一先生をお迎えした。「歯科エックス線画像から広がる全身疾患のスクリーニング」と題して、従来「歯や歯周病の診断に用いられてきたパノラマX線画像が、全身疾患のスクリーニングにも応用可能であることを、具体的な症例をもとに解説された。さらに、AIを用いた画像解析の今後の発展性にも言及された。

因となりやすく、QOLの低下とともに医療費の増大につながる。パノラマX線画像において、田口明先生の研究成果から、下顎骨下縁のオトガイ孔から下顎角部までの皮質骨吸収の程度から骨粗鬆症リスク(正常)3度を推定できること(Mandibular Cortical Index: MCI)、またパノラマX線画像上の第3・第4頸椎付近に見られる頸動脈石灰化所見(Carotid artery calcification: CAC)が動脈硬化の兆候を示唆し、脳梗塞や心筋梗塞の予防に寄与し得ることを示された。

今日歯学教育の現状にも触れられ、国家試験合格者数の抑制傾向が続く中、OSCE・CBTに加え、臨床実習後にPost-OC OSCE(臨床実習後OSCE)を導入されるなど、教育改革が進む現状と課題について詳しく説明いただいた。本講演は、歯科医療の枠を超えた全身管理への視点を再認識させる内容であり、日常臨床におけるX線画像の重要性を改めて考えさせられる貴重な機会となった。

塩尻市立広陵中学校生徒6人が訪問
将来の医療職を念頭に大学病院を見学
塩尻市立広陵中学校の2年生6人が10月8日(水)、「企業見学」のため本学を訪れた。働く上で大切なものを理解し、自分の将来(進路)について主体的に考える力を養うことを目的とした授業で、生徒たちは中村美どり教授(生化学講座)から、松本歯科大学の地域とのつながり、大学で働く多様な職種(歯科医師・歯科衛生士・歯科技工士・看護師・薬剤師・理学療法士・臨床検査技師など)についての説明を受けた後、大学病院での職場見学・体験を行った。

歯科特別専門外来の西窪結香歯科衛生士長からは、歯科衛生士は、患者の口腔ケア管理を担当する重要な職種であることについての説明を受けた。放射線撮影室では、田口明教授(歯科放射線学講座)からCTやMRIなどの最新画像診断装置の説明を受けた。最後に、小児歯科診療室において、中村教授の指導で、生徒が歯科衛生士と患者役となり、歯科診療時におけるバキューム操作を体験し、歯科治療における織

細な操作の難しさを実感した。当日参加した生徒たちは、将来の仕事として医療関係の職種を考えており、真剣な眼差しで説明を受け、各種の体験実習を行い帰途についていた。



山崎薬局長(左端)から説明を聞く生徒たち

受験生の皆さんへ
見せてほしい 君の個性 君の情熱

一般選抜(1期)
共通テスト利用選抜(1期)

●試験日
2026年2月2日(月)・3日(火)

●希望する試験日を選択し、または両日の受験も可能です。
共通テスト利用選抜は、本学個別試験はありません。

●出願期間
1月6日(火)~1月27日(火)

●試験場
本学・東京・大阪

■お問い合わせ■
HOT LINE 0263-54-3210
松本歯科大学 入試広報係
www.mdu.ac.jp

骨粗鬆症は、高齢、女性、閉経、過去に骨折の既往のある人が高リスクである他、歯科領域では進行した歯周病も関係している。骨粗鬆症により大腿骨骨折を起こすと、寝たきりの原因となりやすくと、QOLの低下とともに医療費の増大につながる。パノラマX線画像において、田口明先生の研究成果から、下顎骨下縁のオトガイ孔から下顎角部までの皮質骨吸収の程度から骨粗鬆症リスク(正常)3度を推定できること(Mandibular Cortical Index: MCI)、またパノラマX線画像上の第3・第4頸椎付近に見られる頸動脈石灰化所見(Carotid artery calcification: CAC)が動脈硬化の兆候を示唆し、脳梗塞や心筋梗塞の予防に寄与し得ることを示された。

歯科医師がパノラマX線画像を注意深く診ることで、骨粗鬆症や動脈硬化を発見できる可能性を念頭に置いて、日常臨床の中でパノラマX線画像を診てほしいと提言された。

Matsumoto Dental University SNS Information

LINE QR Code

X QR Code

Instagram QR Code

facebook QR Code